21世紀の国際知的交流と日本

日米
フルブライト
50年を
踏まえて

賀来景英・平野健一郎編

中央公論新社

21世紀の国際知的交流と日本

日米フルブライト50年を踏まえて

常州大学図書館藏

賀来景英
平野健一郎 編

中央公論新社

21世紀の国際知的交流と日本
——日米フルブライト50年を踏まえて——
編　者　賀来景英・平野健一郎

2002年12月5日　初版印刷　　2002年12月15日　初版発行

発行者　中村　仁

発売所　中央公論新社

〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
電話　03-3563-1431（販売）
　　03-3563-3664（編集）
URL http://www.chuko.co.jp/
編集協力　中央公論事業出版
振替　00120-5-104508

印刷・製本　大日本印刷

©2002 Kaku Kagehide, Hirano Kenichiro
ISBN4-12-003346-5 C-0030　Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

J・ウィリアム・フルブライト上院議員が米国議会に提出した法案にもとづいて、フルブライト教育交流計画が発足したのが一九四六年であった。日米間では、一九五一年に日米相互の人物交流に関する覚書が政府間で交わされ、翌年、フルブライト交流計画が発足した。したがって、今年（二〇〇二年）が日米フルブライト・プログラムの五十周年にあたり、さまざまな記念行事が行われた。本書もその記念行事の一つである。フルブライト計画五十周年記念行事としての本書については、この「まえがき」の後半に記述する。

二十世紀の後半と二十一世紀の入口に相当する、この五十年のあいだに、留学生交換を含む国際交流には大きな変化が起こったと考えられる。それは、国際社会の歴史的な変化と日本社会の変化を反映したものである。代表的な留学生交換プログラムであるフルブライト計画も変化しな

いわけにはいかなかった。本書の狙いは、フルブライト計画の歴史的な変化を辿ることよりも、二十一世紀のはじめにおける国際社会、国際交流、留学生交換という全体のなかに同計画を位置づけてみることにある。日米の安全保障観、日米間のマスコミ報道、日米間のＭＢＡ留学、インターネット上の言語問題、日本とアジアの知的交流、日本の国際文化交流の歴史、日本の留学生政策、そして留学一般の意味を考察する論考を集めたのは、フルブライト計画を取り巻く全体の諸側面としてである。フルブライト計画そのものを論じるのではなく、それを取り巻く全体を眺めることでフルブライト計画の意義を明らかにし、併せて、これからの国際交流、留学生交流のあり方を考えようとしたのである。そこで、この「まえがき」では、過去半世紀の国際交流の歴史的変化を簡単に振り返って、フルブライト計画の五十年間が通過してきた歴史の全体を概観してみることにしたい。

第二次世界大戦後の半世紀を時代区分するとすれば、誰もが米ソ冷戦の時期と冷戦終了後の時期に二分するであろう。事実、セネター・フルブライトがフルブライト計画を発想し、提案したときからわずかの間は、まだ冷戦前のつかの間であった。「教育交流によって国際関係を人間化（ヒューマナイジング）する」というフルブライトの理想に可能性もあったかもしれない。「アメリカと諸外国との相互理解を目的とした人物交流計画」の発展を素直に希望してよかったかもしれない。しかし、日本がフルブライト計画に参加した一九五二年には、すでに米ソ冷戦の様相がはっきりしていた。希望し、選ばれ、参加した日本人フルブライター個々人の思いは別として、日米フルブライト計画そのものは冷戦のなかに、冷戦のなかの日米関係のなかに、はっきりと位

置づけられるものになった。冷戦のなかで、フルブライト計画が「(西側陣営の)外国人のアメリカ理解を目的とした人物交流計画」として成功した面があったことは否定できないように思われる。

フルブライト計画に冷戦的な性格が付着してしまったとしても、その性格は冷戦期間中ずっと継続はしなかった。むしろ、冷戦の終焉よりも早くから変化していったように思われる。それは、冷戦より早く国際社会の性格が変化したからであり、国際社会の変化の方に呼応した点で、国際交流計画としてのフルブライト計画の長所がある。国際社会の変化を日本社会の変化に即して述べれば、まず、一九六四年(東京オリンピックの年)に海外渡航が自由化された。七〇年にはジャンボ・ジェット機が民間航路を飛び始めた。人々が自由に国境を越えることができるようになった変化に即して、フルブライト計画は、冷戦構造のなかの日米間唯一の留学プログラムから、多種多様な国際交流のなかにユニークな位置を占める留学プログラムへと変化したのである。この間に日本の国際的な地位が上昇した結果、七九年からは日本政府がフルブライト計画の経費の半額を負担するようになり、八六年からは日本人フルブライト同窓生を中心とする民間からの資金援助も加えられた。フルブライト計画は冷戦終焉前に見事な変身を遂げ、今や新しい国際留学プログラムのモデルとみなされるほどになっている。

フルブライト計画には、発足当初にセネター・フルブライトが述べ、その後今日まで関係者が指針としてきた「フルブライト語録」ともいうべきものがある。上述のようなプログラムの変化の過程のなか、そのテキストは、この半世紀の間に三度読み替えられてきたと思われる。すなわ

ち、同じテキストが、はじめは、フルブライト留学プログラムは国家間の相互理解を助けるものと読まれていたが、やがて、個人の成長発達を支援するものと読まれるようになった。そして、今や、フルブライト計画は世界の「人類益」に奉仕する精神によって成り立つと読まれはじめている。

これは意味深い読み替えである。しかし、もう一度読み替えられる必要が迫っているのかもしれない。ときに「アメリカニゼーション」と同一視される「グローバリゼーション」が急速に進行し（少なくともそうであると、世界の少なからざる人々からみなされ）、それへの激越な反抗として、二〇〇一年に「9・11」が起こったからである。自由に国境を越えて移動し、留学によって普遍的と考えられる知識を習得する一方で、その知識を使い、宗教や文化の違い、国家的対立に藉口して、自他の生命を抹殺する行為を遂げることができるのである。そうした行為を使嗾する政治があり、指導者がいるのである。かつてフルブライトがいったように、国際関係を真に人間化することができるであろうか。

「文明の衝突」とはいわないまでも、文化の深刻な対立が各地で問題となるなかで幕を開けた二十一世紀に、どのような読み替えが意味のある読み替えとなるか。それは、あにフルブライト計画一つにとどまらず、すべての国際交流、文化交流に課せられた課題であるように思われる。読者が本書によって国際交流の新たな意義を探究しようとなさるとき、本書の意味も明らかになるであろう。

ここで本書の成り立ちについて簡単に述べたい。先にも触れたように、本年二〇〇二年は、日米間のフルブライト交流計画の五十周年にあたる。そこで、これを記念する行事が企画されたが、その中心として編者らが位置づけたのが、これからの国際知的交流における日本の役割を問うシンポジウムである。本書におさめられた、シンポジウムでの発言やシンポジウムの討議に資するため用意された論考のいくつかでも言及されているように、フルブライト交流計画が、これまでに実施された国際知的交流事業の中でもめざましい成功例の一つとして数えられることは間違いない。フルブライト交流計画は、これまで、世界百五十数か国にまたがって実施されて来たが、日米間に限っても、八千人を超える交流が実現し、その影響は両国に広く深く及んで今日に至っている。

このように、偉大な成果をあげて来たフルブライト交流計画であるが、編者らは、その五十周年を記念するシンポジウムを企画するにあたり、これを、単に仲間うちの回顧行事にするのでは意味がないと考えた。過去半世紀の間の国際社会の歴史的変化に呼応してフルブライト計画が変容を遂げて来たこと、そして今後、フルブライト計画のみならず、すべての国際交流、文化交流が新たな課題への対応を迫られていることは既に述べた。また、これも先述のように、日本におけるフルブライト計画の位置づけも、かつてとは大きく異なっている。三十～四十年前頃までは、アメリカへ学ぶために渡る稀少な機会の一つであったが、今や他に機会は豊富に存在する。勿論、留学の機会を提供するものとしてのみフルブライト交流計画を評価するのは矮小化の謗りを免れないが、留学機会の提供が知的交流の重要な一部を成すことも事実である。さらに、課題を日本

にひきつけて考えた場合、これからは、日本からの発信にも支えられた真の双方向の「交流」が求められている。近年、日本政府もフルブライト計画の資金負担を折半し、その意味で日米対等の交流計画となったのちも、日本からアメリカへ渡る人がその逆を大きく上回り、加えてアメリカから日本へ来る人は日本研究者が大部分を占めるなど、日米間で偏りが続いているのが現実である。しかも、その「交流」は、特にアジア諸国に視点をあてた、世界との交流でなければなるまい。

こうした認識にたって、世界に対して日本は今後どのような知的貢献を成し得るかを、前向きに論ずる場として記念シンポジウムを企画することとした。日米間という枠組みにもとらわれないという点で日米フルブライト交流計画の周年記念行事の範囲を超えることにもなるが、それこそかえってフルブライト交流計画の精神に忠実な方途かと考えた。本書は、そのシンポジウムの基調講演、討論内容、およびそのシンポジウムに提出された論文を収録したものである。

このシンポジウムを開催し、本書を刊行するにあたっては、シンポジウムにご参加下さった方々、論文をご執筆下さった方々をはじめ、多くの方々からご助力、ご助言を賜わった。ここにすべてのお名前を記せないことをお許し願いたいが、企画をたてる当初段階で有益なご助言を頂戴した成城学園学園長 本間長世氏、東京大学教授 五十嵐武士氏、朝日新聞編集委員 船橋洋一氏の三氏には特に謝意を表したい。また、本書出版にあたり日本ガリオア・フルブライト同窓会より資金援助を得たこと、そして、中央公論新社の平林敏男取締役書籍編集局長、中央公論事業出版の笠松巌社長のご好意がなければ、本書のこのような形での出版は不可能であったことを、

あわせ記したい。

二〇〇二年十一月六日

賀来　景英

平野　健一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

まえがき……賀来　景英
平野健一郎

日米フルブライト交流計画五十周年記念シンポジウム

基調講演
グローバル化時代の知的交流……山崎　正和　13

パネルディスカッション……31
二十一世紀の国際知的交流と日本

パネリスト　キャロル・グラック
孔　魯明
猪木　武徳
岡本　行夫
山本　正
山崎　正和

モデレーター
平野健一郎

日米相互認識のギャップ……林　義勝　87
テレビ報道と日米の相互理解……服部　弘　113
企業派遣によるMBA留学……遠藤　幸彦　151
地政学から言政学へ……出口　正之　189
留学生の文化史的意味……平川　祐弘　221
戦後五十年の努力は報われつつあるか……平野健一郎　255
フルブライト・プログラムに学ぶ
——日本と米国の留学生制度の評価をめぐって……白土　悟　287
坪井　健
横田　雅弘
（補論）日本の留学生受入れ政策の推移……堀江　学　321
（資料）戦後日本の国際文化交流の全体像……戦後日本国際文化交流研究会　345
著者紹介……392

日米フルブライト交流計画五十周年記念シンポジウム

基調講演　グローバル化時代の知的交流

山崎正和

本日は、フルブライト計画五十周年のお祝いに当たりまして、皇太子殿下、皇太子妃殿下のご臨席のもとに、両国のセレブリティの皆さん、フルブライト同窓生の皆さんの前で基調講演をさせていただくことを光栄に存じております。

ヨーロッパの古い歴史のある小さな町に、日本企業の駐在員の一家が暮らしておりました。ある日のこと、子供の誕生日だというので、親がその町にはまだ数が少ない日本料理店に連れていってごちそうしました。刺身だの天ぷらだの定番の日本料理が終わって、子供は幸せそうでありましたが、「おいしかった。でも、日本料理はいつ出てくるの」と聞いたので親はびっくりして、「みんな食べたじゃない」。すると子供は「でも、まだマクドナルドハンバーガーが出てきていないよ」と言ったというのです。これが今の私たちが暮らしている日米同盟関係の文化的な側面であります。

私は一九六四年のフルブライト留学生でありますけれども、当時の日本人にとって、ハワイを経由してアメリカ本土へ飛ぶ旅行というものは、それこそ生涯に一度しかないであろうと思われる体験でありました。一年半の留学生活の間で、私は、例えばニューヨークのオフブロードウェーの劇場に足を運び、あるいはメトロポリタンミュージアムの名作の前に立つたびに、生涯、これが最初で最後の体験だという感じがいたしておりました。

しかし、今、日米は極めて近い関係にあります。二十代の若者がいささかのアルバイトをすると、週末にカリフォルニア旅行ができる時代になりました。この距離の近づき方、五十年間の変化というのは、まさに目を見張るものがあります。しかし、一面では、この距離の近さが、ほん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com